

山岡百介が武蔵国多摩郡八王子千人町に呼ばれたのは八月の半ば——凝乎としていても汗が滴るような暑い日の早朝のことであった。

八王子といえば江戸から十里。

近いといえは近いのだが、気安く行ける道程でもない。どうにも半端な距離である。

百介は、諸国を渡り歩いて怪談奇談の類を聞き集めることを無類の生き甲斐としていような酔狂な男であるから、当然旅熟れてはいるのだが、旅熟れているが故に、却って八王子辺りなどには行つたことがなかった。

長閑な所である。

一面が畑ばかりの畦道では日除けは叶わぬ。

馬の背で揺れ乍ら、百介は次々と伝う汗を拭つた。

こんな日ばかりは半裸の馬子が羨ましい。

前を行く小者も暑そうである。

小者と雖も武門の末に連なる者ではあるうから、ならば馬子のように得手勝手な格好は出来ないものなのであろう。

百介は武士ではない。だから普通は痩せ我慢などはしない。暑い時は暑いなりの格好をする。日本差しの面倒臭さは百介の厭うところである。しかし招かれている身でもあり、本日はかりはそれも叶わなかつた。

馬上は地面より天に近い。

だから一層暑い気がした。

悪いことに風もなかつた。

火急の用向きということである。せめて駆けてくれれば良いとも思うのだが百介の口からは急いでくれとも言い難い。そんな立場ではない。

精遠景を眺めて、暑さを誤魔化すよりない。

八王子近辺には、俗に八王子千人同心と呼ばれる郷士の集団が住んでいる。

八王子千人同心は、平素は農業を生業とする半農の武士達ではあるものの、未だに軍事教練を欠かさず行っている兵達でもあると聞く。

だから百介は、百姓が鋤を振るうその横で、大勢の侍がやっとうの稽古をしているが如き珍奇な情景を心中思い描いていたのだが、どうやらそれは勝手な妄想だったようである。

見たところ所謂田舎の風景である。

但しこの八王子千人同心、田舎侍とはいえ馬鹿にしたものではない。

幕府直属の組織であり、百介の知る限りその歴史はかなり古い。そもそもそれは神君家康公関東入国の折り、代官頭であった大久保長安の下、甲斐武田旧臣の小人頭を中心にして編まれたものなのでさうである。

本来は甲斐国境の警備や治安の維持にあたっていたのだそうだが、その後日光火之番を命じられ、一時期は江戸の火消役なども務めていたこともあるそうである。蝦夷奉行所設置の際には、警備のため遠く蝦夷地まで派遣されたりもしたのだと聞く。

蝦夷地など、百介でさえ行ったことがない。

武士——なのである。

威張っているだけの腰抜け侍が多い中、真に珍しい人種だとも思うが、どういう訳かこの八王子千人同心の組頭には、殊の外知識人も多いとも聞いている。このふやけたご時世に、文武両道に長けているというのは一層に珍しい。日光や八王子の地誌を編纂したりする者までいるというのだから、本物だろう。その所為か、手下である同心達にも蘭学、医学、海防論などに通曉した者が多いのだそうである。

同心、山岡軍八郎もその例に漏れず、最新の医学事情に通じた博識の、田舎同心とは思えぬ通人である。

百介を呼び出したのは、この軍八郎であった。

使いの小者が持つて来た書状には、相談したきことあり、大至急おいで願いたし——と認められていた。呼び出しを受けたのは初めてのことである。慌てて支度を調べ家を出ると、驚いたことに馬まで用意されていた。これは尋常なことではない。

百介の心中は穏やかではなかった。

山岡軍八郎は——百介の兄なのである。

百介も軍八郎も、元を質せば鉄砲組、御先手同心の家に生まれた。

尤も百介は物心つかぬうち商家へと里子に出されたから、樺突同心の父の記憶はない。

出自を一切知らされていなかった所為もあり、詳しいことは知らないのだが、どうやら百介が養子に出されたのも貧窮故のことであつたらしい。それでもどうにも立ち行かなかつたらしく、百介達の父はその後同心株を手放して浪人に身を糺し、失意のうちに亡くなったのだそうである。その辺りの事情は後に再会した軍八郎から聞かされたことである。

結局百介は養い親のお店も継がず、好き勝手に浮き草暮らしをしているのだが、軍八郎は地道に精進し、同心株を買つて八王子同心になつたのである。

見上げたものだと百介は熟熟思う。百介が兄の立場だつたなら、とてもそんな真似は出来まい。百介が筆名に山岡の姓を使わせて貰っているのも、そんな兄を少なからず尊敬しているからに他ならない。

尤も、山岡姓を名乗ることを許してくれた軍八郎の方も、百介に対して同じような感情を抱いていただろうことは想像に難くない。

軍八郎に言わせれば、型に嵌らない百介のような生き方は到底自分には出来ぬであろう、ということになるのである。

解るような、解らないような。そんな気がする。

ただ、育つた境遇こそ違うものの、そこは同じ血を分けた兄弟である。百介の持つ好事家の素質は、一見堅物の軍八郎の中にも確実に巢喰っているらしいのである。もしかしたら軍八郎は、西に怪しき噂を聞けば馳せ参じ東に珍しき事件あらば飛んで駆けつけるような百介の暮らし振りこそを、羨ましく思っているのかもしれない。それが——。

農村の長閑な景観を馬上から眺め乍らも、百介の心中は中に複雑なものだったのである。茅葺きの陣屋のような建物の前で降ろされた。暫くすると眼を剝いた軍八郎が出て来た。

百介の姿を認めると、軍八郎は何故か安心したような顔をして、善く来てくれたと頭を下げた。

「頭を上げてくださいよ——その」

人前で兄上とは言い難い。百介は同心の身内とは思えぬ身態風体をしているのである。

「——いっただいどうされたのです」

軍八郎は顔を上げ、うむ、と唸ってから、

「相談事じゃ」

と言った。

「見て欲しい——屍体がある」

「屍体——ですか」

左様——と短く答えて、軍八郎は百介を建物の中へと導いた。

土間の中央に莫蔭が敷かれていて、その上に筵のかけられたモノが寝かされている。足が覗いているから間違ひなく屍体である。軍八郎は左右に控えていた小者に席を外すよう申しつけると、入り口で留まっていた百介を呼び寄せた。

「あまり見たいものではなからうが——まあ変死である」

他殺——ということだろうか。

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。